

エピソードで綴る子ども理解と授業づくり

「一番思い出に残っているのは国語の読み取りで、友達と意見を言い合ったことでした」と卒業文集に書く子。触られることに超過敏な子どもが、絵本をみんなで見つめ、劇遊びで内容を深めたそのお話を心の杖にして床屋デビューした様子を知らせてくれたお母さん。人に関心を示すことが普段の生活ではあまり見られない子どもが、絵本の読み取りで友だちの発表に興味を示し、自分の思いも言うようになった。「特別支援学級が合唱祭で発表した『群青』の曲をぜひ卒業生全員に歌わせたい」と、中学3年生への授業も頼まれ学校全体に影響を与えた、等々の取り組み。

今年度は「子ども理解と授業づくり」というテーマで、子どもたちと授業のリアルな様子をエピソードを交えて論議してきた。「国語の授業づくり」物語文の読みを通して子どもの心に何を残せる

か、「国語の授業づくり」子どもたちと考えたい、子どもたちに伝えたい思いを『絵本』にのせて、「登場人物になって楽しもう」特性の強い子どもたちと国語の授業づくり、「中学校知的固定学級での実践」「うまれるよいのち」特別支援学級の仲間と学び合う性教育、「多分まあまあ楽しい授業、なのに、胃が痛くなる実践報告」、「被災地（福島）に思いを寄せて〜合唱曲『群青』を通して学ぶ」というタイトルで、知的障害特別支援学級の実践を報告してもらい検討してきた。

今、東京の知的障害特別支援学級の在籍児童生徒数は、平均17人以上で、情緒的に課題を有する児童生徒も急増している。初めて障害児教育に関わる人もたくさんいる。発達・障害・生活面での複雑さを抱える子どもたちと良い関係性を作

り出しながら子どもたちの自己の育ちにつながる学びの在り方を想像し、創造したい。付かず・離れず・諦めず、適度な距離感をもって子どもと教具を介して関わりあう。子どもたちのわからなさや得意なさ、揺れ動く心に共感し、どこを、どうやって支援したらいいのだろうと、試行錯誤する。「何を、なぜ、何のために」と、子どもと教材との関係性を想像しながら、学習内容を創造し、その世界を共有したいと、自分のわくわく感とドキドキ感を持ちながら授業にのぞむ。教師でしか味わえない教える主人公としてのダイナミックさの実践を記録しエピソードを綴り、報告し合ってその意味をとらえなおしていくことを今後も続けていく。子ども理解と授業づくりは終わりのない、やめられない世界である。

特別支援教室がすべての小学校に設置される。多種・多様な子どもたちに即した成長・発達と子どもから出発する教育の在り方について今後も追及していく。「特別支援教室」の件も含めて通常学級の先生たちの参加も期待している。

(拝島・拝島三小)